



Qを追う
陰謀論集団の正体
藤原学思・著
朝日新聞出版 / 1870円

名無しなどではない、 Qのヴェールを剥がす

陰謀論を信じ、自らを愛国者と称する集団「Qアノン」。彼らが信じる陰謀論を最初に唱えた人物「Q」は、日本発祥の匿名掲示板を発端とする「ちゃんカルチャー」をゆりかごに、ツイッターなどのSNSで反響を繰り返して力をつけた。あなたが「Q」か？ 著者は、関係者や「Q」だと囁かれる人物に直接取材し、匿名性を守られ掴みどころのないその正体に迫る。本来「名無し」の者など存在しない。果たして「Q」は何を語るのか。



分断の克服 1989-1990
統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦
板橋拓己・著
中央公論新社 / 1760円

冷戦後三〇年の国際秩序 西ドイツから見た形成期

一九九〇年のドイツ統一で、冷戦後国際秩序の幕が開けた。本書は、当事者である西ドイツの視点から、統一の過程を明らかにする。首脳が外交の表舞台で活躍する現代——統一をめぐる西ドイツ外交についても、首相の指導力が強調され、「コール中心史観」が形成された。対して本書は、ゲンシャール外相や外務省に注目し、西ドイツ外交のダイナミズムを描き出す。現代外交で外相や外務省が果たし得る役割を考える上でも示唆に富む。



ミャンマー現代史
中西嘉宏・著
岩波新書 / 946円

三五年の蓄積から 民主化の失敗探る

一九八八年の大規模な民主化デモに始まり、二〇二一年のクーデターまで三五年の政治・経済的変容を「現代史」と区切る。長い苦難の末、国際社会にも祝福されて生まれた民主化政権はなぜ脆かったのか。その原因は、道路建設に賄賂がつきまとうような政治的構造と、軍のみならず多くの少数民族武装勢力が存在する「暴力の管理の失敗」であり、さらに国際政治の失敗でもあった。三五年を踏まえ将来は暗いとする著者の指摘は重い。



石油とナショナリズム
 中東資源外交と「戦後アジア主義」
 シナン・レヴェント・著
 人文書院 / 4950円

石油をめぐる外交に 隠されたアジア主義者の 眼差しとは

戦後日本の対中東民間外交はいかにして形成されたのか。本書は、出光佐三・田中清玄、中谷武世ら五人の民間人の思想と活動を分析することで、彼らが政府とは別に独自に石油を確保しようとした背景に欧米による支配体制の否定という民族主義が存在したことを明らかにし、アジア主義の観点から戦後日本・中東関係に新たな見方を提示する。自立的な石油の獲得を追求した彼らの思想は、日本の資源外交を考える重要なファクターだ。

憲法と思想史が 見つめる 「近代」と 「人間らしさ」

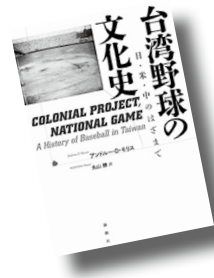


憲法からよむ政治思想史
 高山裕二・著
 有斐閣 / 2310円

「近代」とは何か。『ロビンソン・クルーソー』で描き出された「近代」は、合理と非合理、希望と不安という二重性を宿命づけられていた。思想家たちは近代に潜む非合理性・不安に光を当て続け、紡がれた政治思想の歴史はやがて「人間らしさ」の保障として憲法に結実する。『すばらしい新世界』（オルダス・ハクスリー）の足音から迫る現代社会に著者が送る、憲法条文から理念的根拠・時代背景をたどる新たな政治思想史叙述。

日本統治時代、嘉義農林学校の甲子園準優勝から、メジャーリーグ・国際大会での活躍へ。本書が描くのは、そんな成功物語ではない。台湾にとって野球は、帝国日本の植民地支配の遺産であり国民党政権の「中国」イデオロギーと「台湾」アイデンティティの相克する文化空間だった。旧宗主国日本や西側世界の盟主アメリカとの屈折した関係、原住民への差別意識を内包しつつも存続した、苦悩に満ちた脱植民地化の歴史そのものだ。

台湾野球の文化史
 日・米・中のはざまで
 アンドルー・D・モリス・著
 丸山勝・訳
 論創社 / 3520円



「親日国」台湾への ノスタルジーを超えて